歌の周辺

この「園」は街なかの公園のこと。「白き霧ながるる夜の公園に自転車はほそきつばさ濡れたり」でも差し支えないが、その公園に生い茂っている草のイメージを出そうとして三句目の「公園」を「草の園」とした。

誰かが忘れていった自転車が夜の霧の中で静かに目覚めている。一瞬、ハンドルが翼のように見え、自転車が霧の中を飛行しているような錯覚にとらえられた。そんなふうにして生まれた歌である。

（高野公彦）

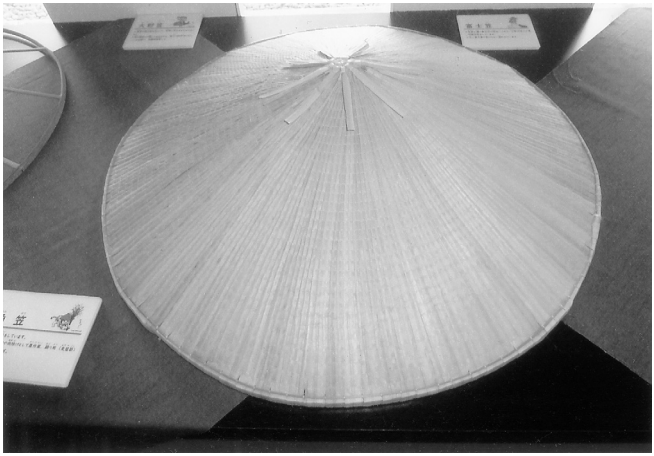
（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・20

白き霧ながるる夜の草の園に自転車は
ほそきつばさ濡れたり

――『汽水の光』

【鑑賞】滑らかな情景描写が三句の字余りで小さな違和感に変わる。静かな夜を歩いていて不意に胸騒ぎを覚えた感覚。するとそこに自転車が現れる。四句の字余りが更に違和感を増す。そして「ほそきつばさ」。もう飛ぶことのない不思議な鳥が佇んでいるかのようだ。結句の「濡れたり」も「自転車は」に対して微妙に捻れていて、いつの間にか異界に迷い込んだような読後感がある。（前中　映）



菅笠（すげがさ）（富山県高岡市）

菅笠のルーツは，400年以上前に小矢部川の氾濫で沿岸一帯が泥沼化し，自生したスゲ草で蓑を作ったところ，軽くて上品で風通しも良いと評判になり，村の副業として菅笠作りに発展したと伝えられる。そして日本では唯一，スゲ田から問屋まで終始一貫した生産技術体系を保持している。

笠には色々な形やサイズがあり，竹で骨格となる笠骨づくりは男性の仕事，笠縫いは女性の仕事とされ，それぞれの家で菅笠を作っていた。昭和30年代までは年間100万枚以上の出荷数だった。現在は農業用よりも踊りの花笠や民芸品などの需要が増えているが，良質のスゲ草を活かした菅笠の高い生産技術は守り継がれ，全国の90％以上のシェアを誇る。

越中福岡の菅笠製作技術は国の「重要無形民俗文化財」に指定されており，歴代天皇即位・大嘗祭の御菅蓋や伊勢神宮式年遷宮などでも使用されている。また，地元の小学校では五，六年生が運動会で花笠を手に持ち「菅笠音頭」を踊るのが恒例となっている。

（写真・解説　北川　澄子）